死神と私

冬華白輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神と私

【Ｎコード】

Ｎ３６８３Ｚ

【作者名】

冬華白輝

【あらすじ】

突然死んでしまい死神に追いかける羽目になってしまった主人公。

死神に説得されて向かった先は死因を調査するための施設。そこで自分の死因を知った主人公は、閻魔をめぐる事件に巻き込まれて調査をすることに・・・。

死神と出会う（前書き）

ミステリーというにはおこがましく、ファンタジーというほど剣と魔法が出るわけでもなく・・・ですが、楽しんで読んで頂ければ嬉しいです♪

死神と出会う

目の前に突如現れた黒い影。

実家の職業柄か、それがいったい何なのかわかってしまった私は、目を合わせる寸前に身を翻し、その影から逃げた。

それは、死神と呼ばれるものだった。死神が迎えに来たということは、今の今まで病気らしい病気もせず、元気だけが取り得の私に寿命がきてしまったというのか。

たった16年しか生きていないのに・・・。“まだ、死にたくない！”そう思って、裸足のまま私は逃げた。

『里乃（りの）・・・里乃・・・』

逃げても逃げても、死神の声は追ってくる。

「・・・チッ・・・里乃、逃げんな、てめえ！」

いきなり口調が、がらりと変わった。私は思わず振り向いてしまい、死神と目を合わせてしまった。

ぜぇぜぇといいながら、その死神は私の肩を掴んだ。

「捕まえたぞ、死神と目を合わせたらそれでお終いってのは知ってんだろ？・・・よし、じゃ、行くぞ」

「・・・あの世に？」

私は聞かなくても解ることを聞いた。死神は、いやな顔もせず、律義に答えてくれる。

「ああ、あの世、天界、天国、霊界、いろいろ言い方はあるが、そこだ。・・・でも、フツー直行するんだが、おまえ達みたいな若い連中は特別、そこに行く前に調査される」

「え、どうして？」

私は思わず聞き返していた。

「・・・何で鬼籍に載っちまったのか、調べんだよ」

死神は天を仰ぎながら、ぽりぽりと鼻の頭を掻く。あまりにも人間らしい仕草に、私は妙にこの死神に親近感を覚えた。

「・・・でも、結局はあの世行きでしょ？」

「いや、場合によっては、死神になったり、調査チームに配属させられたりすることもある」

さらりと答えた死神に私は驚いた。

「じゃあ、死神、あなたも？」

死神は眉をひそめて不快げに私を見る。

「死神って呼ぶな。オレにだって名前くらいある。和幸（かずゆき）って呼べ。・・・まぁ、答えはＹｅｓだ。オレも１８で死んで調査の結果によって死神になった」

「調査の結果って？どんな結果がでるとそうなるの？」

「・・・呪殺だと死神、生け贄および身代わりだと調査チームだな」

「それって、本来死ぬはずではない人じゃない」

「ああ、そうさ。だから、こうして半死半生みたいな生活してんのさ。生き返れるわけじゃねぇからな。死神の仕事はメインはこういう鬼籍に載ったやつの迎えだが、許可が下りれば自分の復讐も可能だ。自分を殺したやつを殺す。調査チームの場合は、生け贄にした人物、もしくは自分が身代わりになった相手を鬼籍に載せることができる」

死神、和幸はそう言って、にやりと笑う。まるで、それが目的で死神になった、とでも言うように。

「そ、そうなの。・・・私は、どうなるのかな？」

「フツーに理由があっての死亡ならソッコーあの世行き。でも、オレには、どーもおまえがフツーに死んだとは思えねえ。多分、死神か、調査チーム入りは間違いねえな」

和幸はそう言うと、私の頭を軽くこづく。

「さ、無駄話はここまでだ。・・・行くぞ」

「う、うん」

私はあの世に連れて行かれることは変わらないというのに、さっきまでの恐怖が嘘のようになくなっているのに気がついた。

和幸のおかげかもしれない。

サーチオーロラ

私達は調査するための施設“照査室(しょうさしつ)”というところに来ていた。和幸が腕のエンブレムを見せると扉が開く。

バリアーのような光の幕をくぐると次の瞬間には、まるで病室のような白を基調とした広い部屋の真ん中に私達は立っていた。

「秋波里乃さん、前に進んでください」

「あ、はい」

目の前にある大きな机に座っている、女の人に手招かれる。

「里乃さん、あなたの健康状況は非常に良好でした。まず間違いなく、鬼籍に載るのはもっと先だったはずです」

「え、あ、そうなんですか・・・」

間抜けな答えを返してから、私は和幸に視線を向ける。

「調査するんじゃなかったの？」

「さっき、光の幕をくぐったろ？あれで全部調査できるんだ。え～と、なんつったっけか？」

「サーチオーロラです」

和幸が聞くともう何回も聞かれているようで、ウンザリといったように女の人は溜め息混じりに答える。

和幸はそう、それそれ。と言いながら私の方に向き直る。

「そのサーキンなんとかってのが、ぜーんぶ調べてくれるわけさ」

「サーチオーロラ！」

ガタン、と立ち上がった女の人は堪忍袋の緒が切れたという顔をしながら叫んだ。

「解ってるって、サーモンチキンだろ？」

「・・・かぁ～ずぅ～ゆぅ～きぃいいい・・・」

「そんなに怒んなよ、沙希。サーチオーロラだろ？冗談も通じねえヤツは嫌われッぞ」

和幸はけろりとした顔で言うと、沙希さんの方に私を押しやる。

「で、こいつはどっちよ？」

「決定権は上官の志貴様にあるわ」

「でも、大体の所は解るんだろ？」

ずいっと和幸が身を寄せると、沙希さんはたじろぐ。

「・・・規律違反だよ、和幸。調査チームから死神が情報を聞き出

してはいけない」

「志貴！」

なおも和幸が沙希さんに聞き出そうとしたとき、私の後ろから声がかかる。ビックリしたのは私だけではないようで、和幸も沙希さんも驚いた様子でこちらを見ている。

私の真横に来ると、志貴と呼ばれた男の人は私に笑いかけた。

「里乃さんには後ほど個別にお知らせします。まずはこれから使う部屋の方に案内させましょう」

「あ、はい、ありがとうございます」

「志貴！なんで、おまえが最前線の照査室までくんだよ？」

和幸は掴みかかりそうな勢いで志貴さんにくってかかる。

「・・・里乃さん、和幸は何か失礼なことをしませんでしたか？」

「おい！志貴！無視すんな！」

「いえ、別に。・・・あの・・・？」

かみつく勢いで真横で叫ぶ和幸と、それを平気な顔で無視している志貴さんに目をやる。志貴さんは戸惑う私を見てクスリと笑う。

「ああ、僕と和幸は上官と部下という関係以前に兄弟なんですよ。ちなみに僕が兄で和幸が弟です。詳しい話はあとで和幸に聞くとい

いですよ。しばらくは和幸があなたのサポートにつきますから」

「あ、はい」

私は和幸を見る。和幸はじっと志貴さんを睨むように見つめている。

「そうそう、僕がどうして本来いるべきはずの閻魔様の元を離れて、ここに来たかっていうとね、しばらくの間、照査室を閉じることになったからだよ」

笑顔のまま、志貴さんは先ほどの和幸の質問に、やっと答えを返す。

「照査室を閉じる！？どういうことです？志貴様」

沙希さんが驚きの声をあげると、志貴さんは表情を曇らせる。

「うん、閻魔様がおっしゃるには、ちょっと問題が起こったみたいでね。今日は里乃さんが最後だったようだからここを一番最後に閉じることにしたんだよ。他の所はもうみんな閉じてある。・・・それで、君達を信頼して、頼むんだけど・・・」

「内部調査か？」

志貴さんの科白を和幸が引き継ぐ。志貴さんはじっと和幸を見つめ、頷く。

「頼めるかい？和幸」

「これやったら・・・」

「・・・許可が下りる可能性は高くなるね」

「じゃ、やる。沙希も里乃も勘定に入ってんのか？」

「・・・沙希だけ。里乃さんには他の仕事を頼むことになりそうなんだ。それも後で里乃さんに直接お知らせしますから。・・・取り敢えずここは閉じる。沙希は本部に戻ってくれ。和幸は里乃さんを部屋に案内して」

志貴さんの指示に二人は大人しく従い、私は和幸に連れられ照査室から宿舎に移動することになった。

宿舎へ向かう

照査室の奥に進むと宿舎へと向かう長い廊下が続いていた。

ずらっと並ぶ扉がすべて他の照査室に繋がっているのだと和幸が教えてくれる。他にも大きな扉があったが、関係者以外立ち入り禁止の札がかかっていた。

「ねぇ、志貴さんって死神？それとも、調査チームの人？」

宿舎の中に入り部屋に案内される途中で、私は沈黙を嫌い和幸に色々質問していた。

和幸も嫌な顔一つせず、私の質問に答えてくれる。

「志貴はどっちでもねぇよ。あいつは、閻魔の参謀（さんぼう）さ」

「参謀・・・？それって偉いの？」

「偉いも何も、志貴の言葉は閻魔の言葉ってくらいに・・・」

和幸はそう言ってから、肩をすくめた。

「実際、志貴と直属の部下のヤツら以外に今の閻魔の姿を見たヤツはいねぇ。あいつが閻魔じゃねぇかって言う奴もいるくらいだ。でも、志貴より先にこの機関に入ってた連中はそれはないと否定する。ま、それもほんの少しの人数だけどな」

和幸の言い様だとずっと前からここにいるのだと言っているようで、私は不意に彼等の年齢が気になった。

「・・・いくつなの？和幸と志貴さんって」

「死んでからの年もプラスすると、俺が生まれたのが、１８２４年だから・・・」

「嘘！？今、２０１２年だよ？すっごいお爺さんじゃない！！・・・・っと」

私は思わず叫んでから、慌てて手で口をふさいだ。

「へいへい、どーせ俺等はジジィですよー・・・。この機関でもかなりの古株にあたりますよー・・・」

拗ねたようにブチブチと文句をたれつつ、和幸は私をうらめしそうに見やった。

「ご、ごめん。・・・つい」

私は恐縮しきりで謝った。和幸は肩をすくめ、苦笑する。

「良いさ、慣れてるからな。・・・今、この機関にいる連中の半分くらいは、志貴が死神だったときに連れてきた連中さ。俺もその一人」

「え、じゃあ、志貴さんっていくつで死んだの？」

「４つ上でさ、俺と同じで、１８の時に死んだんだ。それだけでも

作為的なことを感じるだろ？」

私は頷き、和幸の顔を見上げる。

「俺達はマシな方さ。年齢制限で弾かれて呪殺されてたってあの世に送られる奴もいる。こうやって現世とこちらを行き来することすら許されねえ」

「年齢制限って、どれくらいまで？」

「そうだなぁ・・・本人の身体能力にもよるが、大体２５，６だな」

和幸はピッと人差し指をあげて、答える。

「３０でもいいんだが、その年齢になると呪殺とかで死んだヤツの割合自体が減ってくる。調査チームが無駄な調査と説明をしなきゃなんなくなる割合が増すってわけさ」

少し声が低くなる。

あまり口にしたくない現実なのだろう。本当なら誰でもそのチャンスを与えられて良いのだ。

もちろん留まることを望まず、来世に希望を託す者もいるだろうが。

私は復讐とまではいかなくても、誰が何のために私を殺したのかが知りたいと思う。

しかし未だに死んだという認識が湧かない。こうして和幸と並ん

で歩いて話をしているせいかもしれない。

「そっか。・・・確かに呪殺はともかく、生け贄や身代わりは若い方がいいもんね～」

「そうそうって・・・おまえ、随分、ふっきれた物言いするな」

和幸が呆れたように言うと、私はクス、と笑った。

「私、順応能力が高いことだけが取り柄なの。それに・・・家が家だからね」

「・・・くく、なるほどな」

私の実家の職業を知る和幸は苦笑し、【Ｂ－５５６】というプレートがかかっている部屋の前で止まる。

「着いたぞ、ここがおまえの部屋だ」

和幸は懐からカードキーを取り出すと、ドアの脇のセンサーに通す。

機械音が鳴り自動扉が開く。随分と先進的な作りになっているので軽くショックを受けた。あの世がこんなに機械化されてて良いのだろうか？？

イメージとのギャップに呆然としていると和幸がポン、と肩を叩く。

「入れ、色々と説明することがある」

「う、うん」

豪華な自室

私達は部屋の中に入って、取りあえず周りを見回す。

「ま、いつも清掃班が回ってくるからな。綺麗なもんだろ。今日からはおまえが掃除すんだぞ。当たり前だけどな」

「うん」

「食事は食堂でとる。メニューはいろいろあるぞ。・・・ここでは金の役目を果たすのはこのルームキーだ。これで食事の代金を払うって形になる。・・・無くすなよ？」

和幸はそう言って、さっきのカードキーを私に渡してくれる。

「えっ？・・・食事をするの？」

思わず訊(たず)ねた私に、和幸は肩をすくめた。

「あー、死んでるって言っても俺たちは中間の者だからな。死んでもねえし生きてもねえ。一応、動力源は食べ物ってコトになってるが・・・実際、ここの食べ物が何で出来てるかは誰も知らない。知ってるとしたら・・・。まあ、この世界の元からの住人くらいだな」

「元からの、住人・・・？」

「ま、それはおいおいな。・・・他にも必要なもんが出てくるだろうが、それも全部このルームキーで手に入れられる。趣味のものと

かな」

「へえ、そうなんだ。・・・それにしても、家具も家電も全部そろってるのね」

「そりゃ、誰だって少しでも快適に暮らしたいだろうが。そういう配慮くらいねえと、やる気が失せんだろ」

「ん～、確かに。それでなくても、死ななくても良いのに死んだんだしね」

私はそう言うと、続き部屋の奥の方をのぞき込む。まるで、高級ホテルのスイートルームのようだ。

「豪華～、一人で住むには広すぎるくらい」

「そうだな。でも、それに見合う仕事をするからな」

「そっか」

和幸は私の“なぜなに攻撃”に苦笑をしながら、ここで暮らすための注意点などを教えてくれた。

私が一番驚いたことは、ここでは、望んだものすべてが手に入るということだった。

和幸が例えたのは、高級なバッグや宝石類だったが、他にも思い出の品や無くしてしまった宝物でさえも手に入るというのだ。

どういう仕組みになっているのかはわからないが、どうも、この

世界を形成するものが影響しているらしいとだけ和幸は教えてくれた。

一通りの説明を受け終わり、私はリビング（といえる部屋）のソファーに深く腰掛けた。

「・・・私、結局どうなるんだろ」

「後で知らせるって言ってたし、気にすることはねえだろ。あ、そうそう。俺の部屋はこの向かい側だから何かあったらいつでも呼べよ。寂しいなら添い寝だってしてやるぜ？」

ぼそっと呟くと、ニヤリと意地悪そうな笑顔をうかべて、和幸はそう言った。

「結構です。・・・言っとくけど、夜這(よば)いに来たら殴るわよ」

「っかぁ～、参ったな。最初にクギさされたのはさすがに初めてだぞ」

「当然、そう言わせるような言動をするからでしょ」

私はじとっと和幸を見た。和幸は苦笑をうかべて肩をすくめる。

「いい根性してるよ。・・・じゃ、取り敢えず休んでな。俺は仕事しに行くけど、何かあったら・・・そうだな、そこら辺のドアホン押しまくって誰か呼べ」

「うん、わかった。行ってらっしゃい」

私は立ち上がるとニッコリ笑って手を振った。和幸は少し目を見張り、はにかんだ笑みをうかべ頷いた。

「行ってらっしゃいなんて言われるのは、何十年ぶりだろうなぁ・・・じゃあ、行ってくるよ」

私は和幸を送り出すと、ドサッと備え付けてあったソファーに座った。

北庁舎

「疲れた～・・・いろんなコトがあり過ぎて・・・もう飽和状態だよ～」

リリリリリ、リリリリリ

呟いた矢先、部屋の電話が鳴り出す。私はあわてて受話器を取った。

「は、はい、秋波(あきなみ)ですッ」

『・・・里乃さん？』

「あ、はい、志貴さん・・・ですか？」

『そうです。ああ、それから、名字はもう使わない方がいいですよ、呼ぶのに困るから、個体名として生前の名前を使っているだけで、下ではもう死んでいる身ですし、【家】はもう関係がなくなりますから。・・・和幸に聞きませんでしたか？』

「そ、そういうのは聞かなかったです」

『そうですか。・・・まあ、おいおいそういうことは説明していきますから、お気になさらず』

「は、はい。あの、それで私はどっちになるんですか？死神か調査チームか。それに私の初仕事って・・・」

『まあ、そう慌てないでください。・・・今、迎えをやりました。閻魔様の直属の部下であなたと同じ年頃に死んだ女の子ですから、そんなに警戒もしなくて済むでしょう。詳しくはこちらにて説明するので、迎えの者と一緒にいらしてください』

「あ、はい、解りました」

私は通話を終えると、志貴さんの言っていた女の子を待つことにした。

驚きの連続で他のことを考える余裕が無かったが、ようやくその余裕が出てくる。突然私が死んで、母さん達は驚くだろうな・・・そう思った瞬間、寂しさがこみ上げてきた。

「もう、家には帰れないんだ・・・」

しばらくたってから、ドアの向こうに人の気配を感じて、私は壁についているモニターを見た。そこには一人の女の子の姿が映されていて、なかなか、ドアホンを押せないでいるようだった。

見かねて、私はドアを開けてあげることにする。

「きゃ！」

ドアが開くと彼女は小さく叫び声をあげた。私は笑いをこらえながら尋ねた。

「あの、何か御用ですか？」

「あ、あのっ、わ、私、志貴様に命じられて・・・え、閻魔様、の所に、ご、ご案内に・・・」

彼女はかなりどもりながら、必死に私に解るように説明しようとしていてなんだか微笑ましくなる。

「じゃあ、連れてって。・・・あ、自己紹介しよう！私は里乃。１６歳。宜しくね」

「あ、はい。・・・私は由樹（ゆき）といいます。ええと、年齢は数えてないのですが、死んだのは里乃さんと同じ１６です」

「んじゃ、同い年だね。だって死んじゃったら年なんてとらないから・・・でしょ？」

「は、はい！そうですね」

私と由樹はそこから意気投合し、最初はつまり気味だった由樹の言葉も、すらすらと出てくるようになり、北庁舎（きたちょうしゃ）（閻魔様が仕事をするところらしい）につく頃にはまるでずっと昔からの友達のようになっていた。

「里乃さん、こっちですよ」

由樹が手招くまま私はついていく。

閻魔様の元へ近づくほど、ひんやりとした空気が漂ってくるように思う。

そして、大きな回廊に出ると奥に扉が見えた。

「あの扉の向こうに、志貴様と閻魔様がいらっしゃいます」

「う、うん・・・」

回廊を進み、私達は身長の何倍もある大きな扉の前で立ち止まった。

「志貴様、由樹です。里乃さんをお連れしました」

由樹はそう言うと、返事を待った。

『入りなさい』

扉の向こうから、志貴さんの声が聞こえる。私達はその言葉に従い、自動的に扉が開くと同時に、部屋に入る。

「ようこそ、里乃さん。・・・由樹、ご苦労だったね」

「・・・はい、志貴様」

由樹は頬を赤く染めてうつむく。私はすぐにピンときた。由樹はどうやら、志貴さんのことが好き、らしい。

「あの、私・・・」

「お話は直接、閻魔様に・・・」

私の言葉を遮り、志貴さんはそう言って、部屋の中央にある階段の上の方を見る。

「この上に、いらっしゃいます。・・・さあ、行って下さい」

「・・・私だけで、行くんですか？」

「そうです。・・・我々は、同席は許されていません」

私の確認に志貴さんは頷き、さあ、と私を促した。私はどきどきする胸をそっと押さえて、一歩ずつあがっていく。

そして、赤くて厚いカーテンがある所まで来ると、後ろを振り向く。志貴さん達が心配そうにこっちを見ているのがはっきりと見える。

私は前に向き直り、すぅ、と息を吸い込んだ。

「里乃です」

『どーぞ』

私は息を呑んだ。・・・この声は、女の子の声？

『・・・里乃？』

いぶかしんだ声で名前を呼ばれ、私は意を決してカーテンの中に

入った。

閻魔族

私は思わず見とれてしまった。まだ、小学校5・6年生くらいの女の子の姿。紫がかった青い髪に藍色の目。他の誰とも違う容姿。立場さえ知らなければ、ぎゅうって抱きしめたいくらいの美少女だ。

「・・・そっか、驚いてるんだ。閻魔がこんな子供だから」

私が顔に出していたのか、閻魔様はニッコリと笑ってそう言った。そんなに気分を害したような気配はしない。長い髪を指先でくるくると遊ばせている。

「あ、いえ。閻魔様・・・」

「ううん、いいの。気にしてないから。それと、閻魔って呼ばれるの嫌だなぁ・・・。あたしも名前くらいあるのよ?」

閻魔様は和幸と同じようなことを言う。

「・・・教えて頂けるんですか?」

「うん。・・・あたしの名前は、冥(めい)」

「冥様?」

閻魔、冥様は反芻する私を見て、ニッコリと笑った。

「・・・それで、私のお仕事っていうのは?」

気を取り直して本来の目的を尋ねる。冥様は途端に真剣な表情になった。

「照査室まで閉めなければならないくらいの大事を起こしてくれた裏切り者を、あたし自身の手で捕まえてやりたいのよ。・・・ああ、和幸達のことを信頼してないってワケじゃないのよ？」

「それって・・・」

「そう、里乃の最初のお仕事は、あたしの護衛。しかも、あたしが閻魔だって誰にも知られないようにすること。いい？」

可愛らしく、首を傾げてそう告げる。私は驚きを隠せないまま、冥様に尋ねる。

「・・・私なんかで良いんですか？志貴さん達の方が・・・」

「あなた、知らないの？・・・自分の体に流れていた血の元となるモノ。そして、あなたの魂に受け継がれた力を」

「え・・・血？・・・力？」

私は戸惑う。確かに秋波家は代々巫女を排出する家ではある。だが、冥様が言う“血”や“力”は違う意味に聞こえた。

「あなた、不思議な力を持っているでしょう？どうして、そんな力を持っているか、考えたことある？」

私は首を横に振る。冥様は戸惑いの表情を浮かべる。

「・・・なんで、何も教えなかったのかしら。まだ、先のことと思っていたの？」

「あの・・・？冥様？」

「・・・あのね、あなたの家系には私達、閻魔族（えんまぞく）の血が流れているの」

言い辛そうに、冥様は告げる。私は一瞬何を言われたのか理解できなかった。

「え、閻魔族？」

「そうよ、閻魔族は昔からこの世界に住んでいる一族よ。この世界は閻魔界と言ってね？人間達の言うあの世への通過点。三途の川とも言えるわ。・・・閻魔族の役目は、ここに来た人の生前の善行、悪行を見て、あの世の行き先を決めることが主だったこと。他にも、死神達や調査チームの監督もしているのだけど」

冥様の説明に私は頷く。しかし、私の中に何故閻魔族の血が流れているのかが理解できずにいると、冥様は上目使いに私を見る。

「自分のお父様のことは、覚えている？」

「・・・小さな頃に、死んでしまったから」

私は、首を横に振りながら答えた。それを聞いて、冥様は納得したようだった。

「そういうコト・・・あのね、里乃。秋波家は闇魔族との婚姻を繰り返していて、強い闇魔族の血をひいていた。そしてあなたのお父様とあたしの父は、兄弟なの。あなたのお母様は、再び闇魔族と縁を結び、子を宿した。・・・つまり、あたし達は従姉妹同士」

思い当たる節があった。巫女の修行をする際にいつも聞かされたこと・・・。

「そういえば、いつも母から聞かされてきた秋波家の伝説がありました。ただし闇魔族ではなくて天神の血をひく、そう聞いていたんですが」

「天神でも間違いではないわ。闇魔族は天神の一員だもの。秋波家の巫女の力は闇魔族の血が入っているから、強いのよ。・・・理解できた？」

「ええ・・・。でも、なんだか驚き過ぎて」

私はめまいを起こしたように、ぐらぐらと足下が揺れるのを感じた。

理解はした。でも、心がついていかない。

「何も知らなかったのなら、当然ね。・・・ねぇ、里乃お姉ちゃんって呼んでイイ？あたしのことは冥って呼び捨ててくれて構わないわ。・・・あたしは１２歳であなたより年下だし」

「そ、そうなの！？・・・てっきり、見た目より年上なんだろうな～とかって思ってたわ」

和幸や志貴さんといった例があるから、冥が年下と知り私は驚いた。

「あたし達はある年齢に達するまでは人間と同じように成長するの。だから里乃お姉ちゃんもちゃんと今まで成長してたでしょ？」

「そういえば・・・って、私も？だって、母さん達はちゃんと年を重ねて・・・」

「うん。だって、里乃お姉ちゃんのお母様は人間の血の方が濃いもの。里乃お姉ちゃんは逆ね」

聞き返した私に、冥は答えてくれる。

「そうなんだ・・・。それって、父さんが闇魔族だから？」

こっくりと頷いて、冥は肯定する。

「そう。あなたのお父さまはもう３００年以上生きていた方だったけど、見た目は若かったはずよ。３００歳なんて闇魔族ではまだ若い部類なの。でも死神や調査チームとは違って死ぬことはあるわ。あたしの父やあなたのお父さまのようにね。」

「私はどうなるの？一応闇魔族の血は引いてるけど、もう死んでるんでしょ？」

「死んでなんていないわ。魂の安全の為に無意識に器を捨てただけだもの。天神の一族だから、精神体が本来の姿だしね」

「そうなの！？・・・でも、鬼籍に載ったから、死神が迎えにきた

んでしょ？」

冥は少し考えるそぶりを見せて、頷く。

「・・・身体から魂が離れれば鬼籍にその名前が刻まれるの。ここに来る前にサーチオーロラをくぐったと思うけど、そこでも何の不審も出なかったでしょ？まあ、ちょっと志貴にお願いしていじってもらったんだけど。・・・まだ、里乃お姉ちゃんが闇魔族の血を引いてるってコトは他には秘密にしておきたいから」

「志貴さんは知ってるの？」

「うん。志貴と由樹には話したわ。・・・でも、あたしと里乃お姉ちゃんが従姉妹同士、っていうこととかは知らせてない。ただ、闇魔族の血を引いてるってコトだけ」

冥はくすっと笑う。こうして見ていると、本当に見た目通りの年齢なんだと理解できる。

「冥はいつ闇魔になったの？」

「ついこの間よ。前の闇魔であった父が死んだの。・・・年齢のことで反対の声もあったんだけど、結局あたし以上の適任者がいなくてね。・・・まあ、あたしは代理だから良いかってことになったんだけど」

「代理・・・？」

冥の言葉に引っかかりを覚える。誰の代理だというのだろう。その事が無性に気になった。

「うん。本当の閻魔が就任するまでの、ね。あたしも、あたしの父もその前の閻魔達もみんな、そう」

「本当の閻魔って・・・」

「“閻魔法王(えんまほうおう)”と呼ばれる存在のこと。それは・・・里乃お姉ちゃん、あなたのコトよ」

冥は微笑んだ。私は、冥の言葉に驚いて、目を見開いた。

閻魔法王

「私が、閻魔法王！？・・・本当の閻魔？」

「そうよ、あたしは里乃お姉ちゃんが来るまでのつなぎ役。里乃お姉ちゃんがこんなに早く来ることになったのは、今、騒ぎを起こしている連中の仕業ね。お姉ちゃんが“閻魔法王”であることを知って、力が封印されてる間に魂ごと滅ぼそうと企んだのよ。奴らは本当の閻魔が就任するのは困るんだわ。でも失敗して魂は残った。何故失敗したのかはよくわからないけど秋波家の血筋のおかげかもね」

私は、呆然と冥の言葉を聞いていて、“秋波家の血筋”という言葉にハッとして呟く。

「・・・もしかして、母さんは、すべてを知ってた？」

「当然よ。だって、秋波家とはすでに約束済みのハズだもの。・・・長子は閻魔法王になるからいずれは閻魔界に行くと」

「でも、私そんなこと知らなかった。本当の閻魔って言っても・・・それに、力が封印されてるって・・・」

戸惑う私に、冥は頷く。

「うん。秋波家の人たちももっと先の話だと思っていたのだわ。後できちんと説明しに行かないとね。・・・他に伝承でなにか聞いたことはない？強い力を感じたとか・・・。里乃お姉ちゃんの力は人間の世界で暮らしやすいように封じられていたはずなの。それが物

なのかなんなのかはわからないけれど」

私は冥の藍色の目に見つめられ、フッとひらめくモノを感じた。

「・・・私、母さんになにか言われた気がする・・・小さな時だからあんまり覚えてなくて・・・」

「それが里乃お姉ちゃんの力に関係してるんだわ。・・・里乃お姉ちゃんは闇魔法王になる定めなの。だから本来の力を取り戻さなきゃ」

「私に・・・どんな力があるのかしら」

不安を抑えきれず、私は冥にすがるような視線を向けた。

「大丈夫、あたしが守ってあげる」

「でも、それは私の初仕事でしょ?冥を守るって」

私が首を傾げると、冥はいたずらっ子のような笑みを浮かべる。そうすると普通の人間の子どもと変わらないように感じた。

「それは名目上よ。志貴達にはそう言ってあるの。里乃お姉ちゃんが闇魔法王だって知ってるのはあたしと里乃お姉ちゃんと騒ぎを起こしている連中だけ。だからホントは逆。あたしが里乃お姉ちゃんを守るの。奴らは必ず里乃お姉ちゃんを狙ってくる・・・」

「じゃあ、二人だけの秘密なのね」

冥はニッコリと笑いながら頷く。

「絶対に秘密よ。これはトップシークレットなんだから」

「解ったわ」

「じゃあ行きましょう？・・・最初の話通りにね」

私は頷いて、冥を引き連れて階段を下りた。

「・・・閻魔様」

志貴さんが緊張した様子で冥を見る。

「志貴、由樹。後は頼むわね？・・・あたしは里乃の所にいるから」

「はい、閻魔様」

「お任せください」

二人は深々と頭を垂れた。私は二人に嘘をついていることを後ろめたく思いながら、冥を側に引き寄せた。

「それじゃあ行きましょうか？里乃お姉ちゃん」

冥はくすっと笑いながらそう言って私を見上げた。志貴さん達がはじかれたように顔を上げる。

「そうね・・・冥」

「そうそう、それで良いの。だいぶ慣れてきたわね、里乃お姉ちゃ

ん」

にこっと笑い、冥は私の手を取る。

「さぁ、宿舎に行きましょ。里乃お姉ちゃん。案内は任せてちょうだい」

冥はそう言って私の手をぐいぐいと引っぱっていった。・・・呆然と佇む志貴さんと由樹を残して。

考察

宿舎内は広く同じようなドアが続くため、ここで暮らす冥がついていても道がわからなくなってしまった私達は、迷いながらようやく自室前に戻ってきた。

「里乃っ！」

【Ｂ－５５６】というプレートがかかっていることを確認して、ホッとしながら冥と共に部屋に入ろうとした時、後ろから声をかけられる。

私達は振り返って声の相手を見た。

「和幸・・・？」

私はその形相を見て声を詰まらせた。かなり怒っている様子で、和幸は私に詰め寄る。

「どこ、行ってたんだ！？ちょっと心配になって戻って来てみたら、おまえ、部屋にいないし！・・・って、その子は？」

文句の途中で冥の存在に気付いたようで、不審そうに尋ねる。

「冥っていうのよ。私の初仕事」

「・・・じゃあ、おまえ、死神になったのか？」

「そう、なるのかな？死んだ理由が理由だし」

「そう、なのか」

和幸は少しばつが悪そうに言った。つまり、死神＝呪殺という式が成り立つからだ。

「まあとにかく、私がこの子の世話をすることになったから。・・・冥、こっちのお兄ちゃんは志貴さんの弟で和幸って言うの。困ったことがあったら、このお兄ちゃんに聞いた方が早いわよ」

「うん、わかった、里乃お姉ちゃん」

冥は素直に返事をした。和幸を見る目は楽しそうに笑んでいたが、和幸はそんなことには気がつきもしない様子で、肩の力を抜く。

「里乃、これで、寂しくなくなったな」

「そーねっ、あなたに添い寝して貰わなくても平気そうよ」

「・・・根に持つなぁ」

和幸は私を気まずそうに見やり、それから、クスクスと笑う冥を見る。

「可愛い子だな。・・・でも、日本人じゃねぇな」

スゥ、と目を細めた和幸に、冥は肩を竦めた。

「当然だよ。だってあたしはここの生まれだもん。誰も、里乃お姉

ちゃんがあたしを“下”から連れてきたなんて言ってないわ」

「じゃあ、閻魔族か・・・？」

和幸はそう言って、冥を見た。

「そうだよ、閻魔様の遠縁って、思っといて」

「わかった。どおりで容姿が普通の人間とは違うわけだ。・・・しかし、最初の仕事がこれとは、随分と大変だな。志貴がやりゃいいのに」

はぁ、と盛大な溜息をついてみせて、和幸は冥を見る。

閻魔様の遠縁というだけでも絶大な発言力を持っているものなのだと、ここに来る途中、冥に教わった。和幸の溜息はそれを知っているからこそのものなのだと、理解する。

「志貴さんは忙しいのよ、閻魔様のお手伝いしなきゃならないんだから。・・・そういえば、和幸って、志貴さんとは全然似てないのね」

「・・・まあ、あいつと俺は、母親が違うし？」

軽く返されて、私は慌てる。まずいことを聞いてしまったのだろうか？

「え！そうなの？・・・やだ、私・・・」

「気にしなくていいぜ、里乃が考えているようなもんじゃねえから」

和幸は相好を崩してそう言った。私はその顔を見てホッとする。本当に気にしていないような、あっけらかんとした笑みだったから。

気を取り直してルームキーをセンサーに通す。扉が開き私達は中に入る。

「心配かけて、ごめんね。和幸が心配して来てくれるとは思わなかったから・・・。実はね、志貴さんから呼ばれて由樹に闇魔様の所まで連れて行ってもらってたの。そこで、冥を預かったのよ」

「いや、俺もさ、様子見に来て・・・ちょっと慌てちまって。悪りぃ、おまえに対して腹たてることじゃなかったな。おまえが慣れないうちにふらふら出歩いたんじゃねえかって思っちまって」

「私、そんなに馬鹿に見える？」

私はムスッとして、ソファーに座る。

「いや・・・、ごめん」

和幸は向かい側のソファーに座り素直に謝った。頷いて私は身を乗り出した。

「で、内部調査で何か解った？」

「ああ・・・あんまり喜べない情報が手に入った。・・・どうも、今回のは大事になりそうだな」

言い淀んでいる和幸を見ながら、私は考えていた。私の力のこと、

冥の言ったこと。そして、私を狙う連中のこと。

「もしかしたら、かなり古参の連中が関わってるかもしれない」

だろうな、と思った。

私と冥の事を知っている人が、比較的新しい死神や調査チームにいるわけがない。冥のお父さまが在位していた頃、側にはべることが出来て、なお且つ、闇魔族の実情に詳しい人物が怪しい。

だとしたら、古参の人達の方が確率は高い。

「そう、なんだ」

自分の考えは言わずに、ただ和幸の話に耳を傾けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3683z/

死神と私

2011年12月25日19時49分発行